

第 1 講：19 「子供が羽根を」

はじめに

おつとめは、救済の具体的な方法の一つである。このおつとめは、「かぐらを主としててをどりに及ぶ」もので、つとめの地歌が「みかぐらうた」である。名称は「かぐらの歌」であるが、てをどりの歌を含めて「みかぐらうた」と呼び習わしている。

てをどりの歌は、慶応 3 年正月にはじまり、同 8 月に到る 8 カ月の間に教えられ、お手振りは、満 3 年かかって教示されている。今回のテーマである『稿本天理教教祖伝逸話篇』19 の「子供が羽根を」は、このてをどりを教えられるに当たって、教祖がどのように教示されたかについて、梅谷四郎兵衛先生が先輩の先生から聞いた話である。『逸話篇』に、

三度まで教えて下さるので、六人のうち三人立つ、三人は見てる。教祖は、お手振りして教えて下されました。そうして、こちらが違っても、言うて下さりません。『恥かかすようなものや。』と、仰っしゃったそうです。そうして、三度ずつお教え下さりまして、三年かかりました。教祖は、『正月、一つや、二つやと、子供が羽根をつくようなものや。』と、言うて、お教え下さりました。

とある。

この逸話によって学ぶことは、①お手振りの教示の方法と丹精、②違っても言わない、③教える時は、優しく、柔らかく、の三つを挙げることが出来る。

1. お手振りの教示にみる丹精

当初、お手振りを学ぶには、誰ひとり舞踊の心得があるわけではなく、「踊って見よ」といわれても、そう踊れるものではない。おさしづにも、

今はお手振りと言う。これは元々何じゃいなあというような処から始めたもの。元々何が何やら分からん。

ほんの言葉分かるだけのもの。 (明治 34 年 11 月 26 日) とあり、「世界始めたのも同じ事、人間拵えたのも同じ事。」(前同)とも仰せになっている。初めてお手振りを教えて頂いた人は、豊田村の仲田佐右衛門、辻忠作、前裁村の前川喜三郎、今村善助、三島村の北田嘉一郎の各氏である。このうち、辻、前川の両名は歌も習い、歌はこのほか前裁村の村田幸右衛門が教わっている。

教祖は、満 3 年の歳月をかけて十二下りのてをどりを教えられている。この逸話篇の一つ前「理の歌」には、

この歌は、理の歌やから、理に合わして踊るのや。どういうふうにも踊ったらよいか、皆めいめに、よいと思うように踊ってみよ。」と、仰せられた。そこで、皆の者が、それぞれに工夫して踊ったところ、教祖は、それをごらんになっていたが、「皆、踊ってくれたが、誰も理に合うように踊った者はない。こういうふうにも踊るのや。ただ踊るのではない。理を振るのや。」と、仰せられ、みずから立ってお手振りをして、皆の者に見せてお教え下さされた。こうして、節もお手振りも、一応皆の者にやらせてみた上、御みずから手本を示して、お教え下さされたのである。

とある。

まず、皆の者にやらせてみる。次に教祖自ら立って教えられているのである。その教え方も、6 人のうち 3 人が立って踊り、3 人はそれをみている。次に踊る人と見ている人が交替するという方法をとられている。「人のふり見て」の俚諺ではないが、自らの踊りを他人の踊りを見ることによって確かなものとなっていく、教育の重要な方法の一つである。これを 3 度ずつ、というのは、1 回に 2 交替を 3 度であるから計 6 度ということになる。しかも満 3 年かかけておられるのである。

2. 間違いを指摘しない

お互いに見合いをして学ぶわけであるから、当然間違えることもあるであろうし、お互いに気付く。しかし、教祖は、間違いを指摘するのは、『恥かかすようなものや。』と仰せになって、誤りを正しておられない。それよりも、回数を重ねて教えられている。

先生方は、次第に習熟して、間違えることがないようになったものと思われる。お手振りは、間違わないようになるまで、回数を重ねて学ぶ必要があることを示唆しておられ、折角の陽気てをどりであるから、よしんば誤っても指摘して恥をかかすようなことがあつてはならないと教えられているように思う。

3. 教える時は、優しく、柔らかく

教祖は、『正月、一つや、二つやと、子供が羽根をつくようなものや。』と言って、お教えになられた。このところあまり見かけなくなったが、羽根つきは、日本の正月に行われてきた伝統的な遊戯のひとつで、ムクロジ（無患子）の種子に羽を付けたものを羽子板で打つ遊戯である。羽根つきの遊び方には、2 人が向かい合って羽子板を持ち、羽根を打ち合う追羽根と、羽子板を用いて羽根を打ち上げ、回数を競い合う揚羽根の 2 種類がある。

救済の手立てとして教えられた大切なおつとめであるから、おつとめをつとめる時の真剣な心構えは重要であるが、あくまでもてをどりは、人が勇めば神も勇むと教えられている陽気てをどりであるから、まさに子供が羽根をつくように、優しく、柔らかい心であることが、教えるときも、学ぶときも、そしてつとめる時も大切であることを教えられているように思う。これは、鳴物を教えられた逸話からも窺える。例えば、教祖は、三味線を飯降よしゑに教えるに当たって「…三味線の糸、三、二と弾いてみ。一ツと鳴るやろが。そうして、稽古するのや。」とか、「稽古出来てなければ、道具の前に坐って、心で弾け。その心を受け取る。」(『稿本天理教教祖伝逸話篇』54「心で弾け」)とも仰せになっている。また、明治 13 年秋、個々に鳴物やお手振りの修練ができていても、役割が決まっておらず、手合わせすることもなかったのであるが、教祖はおつとめを急ぎ込まれた。つとめることに逡巡していた人々に教祖は、「さあ〜鳴物々々という。今のところは、一が二になり、二が三になつても、神がゆるす。皆、勤める者の心の調子を神が受け取るね。」(『稿本天理教教祖伝逸話篇』74「神の理を立てる」)と仰せになっている。